

資料紹介

国民党及び南支石炭資源に関する資料（1）

佐賀県立図書館資料課 郷土調査担当

石橋 道秀・田中 智美

はじめに

本稿で紹介する書簡は、平成二十二年（二〇一〇）佐賀県立図書館に寄贈された塚原嘉一郎関係資料（以下、「資料」）の一部である。

「資料」には、塚原嘉一郎^①（以下、塚原）に宛てた蒋介石、唐紹儀^②、章士釗^③や汪兆銘^④、何天炯^⑤など国民党関係の重要な人物、あるいは革命を支援した宮崎滔天^⑥宛の書簡が併せて一六点含まれている。これらは、南支石炭開発に関するものや塚原への案内等である。書簡の概要については、後掲の一八頁の目録を参照されたい。

本稿では便宜上「国民党」の用語を使用している。書簡の差出人が属した組織は、一九一一年の辛亥革命後の国民党、中華革命党、一九一九年に成立した中国国民党であること、また、作成年が不詳の書簡が多いことからこれらの書簡を理解する上で重要な背景として国民党を使用する。

また、中国南部、華南地方のかつての呼称である南支を本稿では使用している。

塚原は、明治二九年（一八九六）三井物産に入社し、明治四一年（一九〇八）上海支店勤務を命じられている。上海時代の塚原は、秋山真之の知遇を

得ると共に南支の石炭関係の情報を入手できる立場にあったと推定される。^⑦

三井物産は、上海支店を設けて石炭の販路拡張にあたり、「支那本土を初め満洲、朝鮮」まで鉱区調査を展開している。^⑧

作成年が明らかな書簡は、孫文の第三革命（一九一五～一九一六）後に作成されたものであり、国民党の資源戦略の一端を解明できる資料を含んでいる。

そこで、本稿ではこれら書簡を翻刻すると共に、中文については翻訳を付し、今後の研究の一助になることを願って掲載することとした。

しかし、紙幅に限りがあるため、国民党の資源戦略の一端及び塚原と国民党との人脈を知りうる資料として、何天炯書簡四通、汪兆銘書簡一通、及び蒋介石書簡一通を取り上げることとした。

一 何天炯書簡の概要

何天炯（一八七七～一九二五）は中国広東・興寧出身の革命家で、広東同盟会会長も務めた。辛亥革命が起きると、孫文の駐日代表となり活躍した。^⑨ 塚原と何天炯との関係を知る上で、次の山田純三郎の回想記述は重要であるため、少々長くなるが引用する。^⑩

孫文の幕僚に何天炯といふ廣東の男があつた。それが第一革命の時に日本へ鐵を持つて來た。滿鐵で分析したところに依ると非常に良い鐵である。夫れを將軍（筆者註・秋山真之のこと）が記憶してゐて私（筆者註・山田のこと）に日本は鐵が不足だから今から鐵の心配をしておけといはれた。それが動機となつて大正六年の九月孫文氏の招電に依つて塚原氏が廣東に赴き、私と何天炯氏と落合つて諸種の準備を爲し、又日本から技師を派遣する爲め十二月日本に塚原氏が歸り、私は汕頭にゐて技師を待合せ鐵山に行つて取調べてみると、山を崩してゐる其の分だけで裕に一億萬噸はある。

何天炯書簡は四通で、作成時期は大正八年（一九一九）頃かと考えられる。その他、大正一四年（一九二五）何天炯が來日したときの経費の支払控が確認できる。¹¹

1-1 何天炯書簡（大正八年（一九一九）七月四日）

山田邸から実用品が届いたこと、山田に相談した件の結果伺い等。「銀座伊東屋製Ⅵ」の用箋使用。調査時、この書簡以外に汪兆銘の書簡一通も同封されていた。しかし、元々は次に掲げる蒋介石書簡と共に「汪兆銘 蒋介石 両氏書信」と墨書された封筒に入れて保管されていた可能性が高い。

1-2 何天炯書簡（大正八年（一九一九）九月二五日）

鉦山の件の進捗確認、及び連絡方法の見直し提案。「上海九華堂寶記製箋」の用箋使用。

1-3 何天炯書簡（年不明）七月二七日

何天炯の友人が持つ安徽省宣城にある石炭鉦山の概略、及び日本からの調査員派遣依頼。1-1同様の用箋使用。四枚。

1-4 何天炯書簡（年不明）一〇月一八日

「何天炯氏ヨリ宮崎滔天氏ニ宛テタル書信」と墨書された封筒に入れられ保存されていたものである。金策の相談、芳川や塚原らとの調整依頼。

二 蒋介石書簡の概要

蒋介石（一八八七・一〇・三一―一九七五・四・五）は、中国浙江省奉北県出身の軍人、政治家である。中華民国初代総統。二〇歳で渡日、一九一〇年日本の「振武学校」卒業後、士官候補生となった。この間中国同盟会に加入し、一九一〇年東京で孫文に会ったといわれる。一九一一年辛亥革命が起こったため帰国、戦法隊の指揮官の一人として杭州を占領、のちに上海軍第五隊長となった。その後しばしば日本にも渡っている。¹²

蒋介石書簡は一通含まれていたが、「汪兆銘 蒋介石 両氏書信」と墨書された封筒に収められていた。書簡は年号を欠くが、塚原のもてなしに対する礼状である。

なお、塚原は一九四八年、中華民国憲法制定及び公布を言祝ぐ書簡を送っている。この中で塚原は、一九一六年の廣東での思い出を語っている。¹³

凡例

- 一、漢字の字体はおおむね常用漢字に改めた。
- 一、固有名詞は原文の字体を尊重した。
- 一、変体仮名は平仮名に改めた。
- 一、字画の不明瞭な文字は□で表した。字数を確実にし得ない場合は□と示した。
- 一、抹消した文字が判読できるときは参、抹消した文字が判読できないときは■で表した。
- 一、傍注は次のように表した。（例）（カ）誤字や疑いがあるとき。
- 一、日本語による書簡については、影印及び解説文を付し、適宜句読点を施した。
- 一、中国語による書簡については、影印、解説文と共に翻訳文を掲げた。

【訳文】

玉章我兄大鑑 長崎から以前送った手紙は、すでにご覧になったことと存じます。

ここ東京において旧友、塚原嘉一郎様と会い、すべてありのままに話し合いました。先生は来月から広東に赴かれます。民国以来の賛助により、私の事業は多岐に至り且つ巨大なものとなりました。今では四川実業の前途に関わる更なる良い計画案があります。可能であれば、打ち合わせをお願いします。私は明日横浜へ向かい、途中時間がありましたら、改めて手紙をお出しするようにします。ご多幸をお祈りいたします。

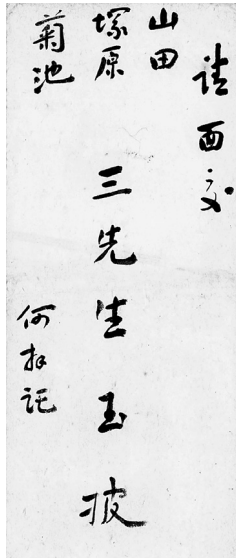
汪兆銘謹啓

三月十六日

日本東京にて

12 何天炯書簡（大正八年（一九一九）九月二十五日

【封筒】



請面交

山田

塚原 三先生玉披

菊池

何拝託

【本紙】

塚原・山田・菊池 三先生に宛て、鉾山之件曾経諸君承諾協力賛助因之弟等種々之計畫今久不接函未知近況何似曾蒙電催催而諸塚原兄以来電不即相覆弟用益深焦灼茲因 宮崎先生回国之便特懇其代達鄙情盖徒函電往來恐有辭不達意之嫌也請鑑察之特此拱候回音順問

芳川
犬塚 兩先生福安

何天炯九月廿五夜

塚原、山田、菊池 三先生把握鉾山之件曾經

諸君承諾協力賛助因之弟有種々之計畫

畫今久不接函未知近況何似曾蒙電催促

而塚原兄以来電不明相覆弟用益深

焦灼茲因 宮崎先生回国之便特懇其代達

鄙情盖徒函電往來恐有辭不達意之嫌也

請鑑察之特此拱候回音順問

芳川

犬塚 兩先生福安

何天炯九月廿五夜

【本紙訳文】

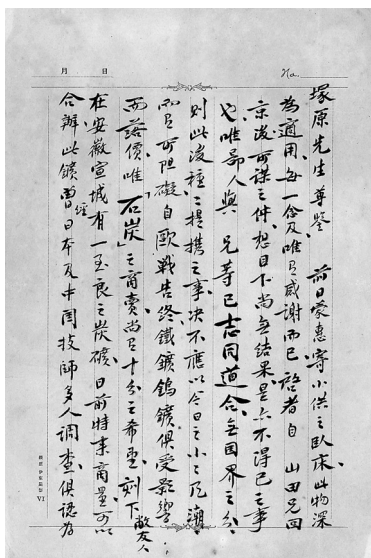
塚原様、山田様、菊池様 鉾山の件は確かにご承知のことと存じます。かつて皆様は力の限り賛助することをご承諾いただきました。このことから私は様々な計画を考えています。今久しく私の手元に手紙が届かず、進捗状況がわかりません。以前電報にて催促をし、塚原様の電報を受け取りましたが、それ以来様子がわかりません。当方は準備ができており、気をもんでおります。そこで、宮崎様の帰国の際、代わりに私の気持ちをよろしくお伝えくださるようお願いしました。蓋し、いたずらに手紙や電報のやりとりをしても齟齬がでてくる恐れがあります。このことをご賢察ください。つきましては、回答をお待ちしております。順問。

芳川様、犬塚様のご多幸をお祈りします。

何天炯九月二十五日夜。

13 何天炯書簡（年不明）七月二十七日

【本紙】



月 日
 刻下排日厄潮未息、然有鄙人在滬照
 料、則亦無困難之事、但此件对于鄙等
 团体以外之人、請為嚴守秘密、若
 兄等認此件為不能進行或無進行之必要時、則請即
 日明別答覆、以免鄙人对于友人有遲
 延之咎也、專此并問
 菊池 山田諸先生大為
 聞犬塚先生貴體未安已
 弟 何天燭

月 日
 一目前用土法開採、每日約五十噸以上、
 一由破山至水路、約十五海里、一夜可到蕪湖、
 一在蕪湖之賣價約十四圓(純利約三圓五十錢)、
 一某技師云、如得十萬噸以上之機械、則每日
 可出炭二百噸以上、以每噸純利三圓五十
 錢計算、每日實可獲七百圓、其獲利不
 可謂不厚也、前希意欲、兄等即
 日商議、囑馬場君即日前來調查、

月 日
 有甚大之價值、舊歲年末、日本商家、对于此鐵
 曾有激烈之競爭、結果唯有失敗、唯友人甚信
 任鄙人、且願全權由鄙人辦理、茲將該鐵情形、
 大略說明如下、
 一鐵區約三千畝、
 一採鐵之執照(許下)、
 一炭量約五百萬噸以上、
 一炭之厚層、平均約五尺、
 一炭質有煙炭、其質係中等以上、

塚原先生尊鑑 前日蒙惠寄小供之臥床此物深
 為適用、每一念及、唯有感謝而已、啓者自 山田兄回
 京後可謀之件、想目下尚無結果、是亦不得已之事
 也、唯鄙人与 兄等已志同道合、無國界之分
 則此後種々提携之事、決不応以今日之小々及潮
 而有所阻礙自歐戰告終、鉄鉍錫鉍、俱受影響
 而落伍、唯「石炭」之商売、尚有十分之希望、刻下敝
 友人
 在安徽宣城有一玉良之炭礦、日前特來商量可以
 合辦、此礦曾終日本及中国技師多人調查、俱認為
 有甚大之價值、旧歲年末、日本商家、对于此鉍
 曾有激烈之競爭、結果唯有失敗、唯敝友人甚信
 任鄙人、且願全權由鄙人辦理、茲將該鉍情形、
 大略說明如下、
 一 鉄區約三千畝、
 一 有採鉄之執照、(許下)
 一 炭量約五百萬噸以上、
 一 炭之厚層、平均約五尺、
 一 有煙炭其質係中等以上、
 一 目前用土法開採、每日約五十噸以上、
 一 由破山至水路、約十五海里、一夜可到蕪湖、
 一 在蕪湖之賣價約十四圓(純利、約三圓五十錢)
 某技師云、如得十萬噸以上之機械、則每日
 可出炭二百噸以上、以每噸純利三圓五十
 錢計算、每日實可乃七百圓、其獲利不
 可謂不厚也、茲鄙意欲 兄等即
 日商議、囑馬場君即日前來調查、

頃刻下排日厄潮未息、然有鄙人在滬照
 料、則亦無困難之事、但此件对于鄙等
 团体以外之人、請為嚴守秘密、若
 兄等認此件為不能進行或無進行之必要時、則請即
 日明別答覆、以免鄙人对于友人有遲
 延之咎也專此并問
 芳川
 山田諸先生大為
 菊池
 聞犬塚先生貴體未安已
 別函慰問矣
 弟 何天燭
 七月廿七

【訳文】
 塚原先生尊鑑。一昨日私の病氣のお見舞いに結構な
 物を頂き、本当にありがとうございます。ただただ
 感謝するのみでございます。陳者(さて)、山田様が
 東京に帰られた後お申し出いただいた件は今なお結
 果が出ず、これまた止むを得ないことだと思ひます。
 ただ、私とあなた方とは既に志が同じです。国境を
 つくらなければこのあとの様々な提携は、決して今
 日の些細な良くない風潮(排日の風潮)によって妨げ
 られるものではありません。欧戦が終わってから、
 鉄鉍、タングステン鉍(錫鉍)はみな影響を受け価格
 が下落しました。ただ、「石炭」の商売はまだ十分な
 希望があり、私の友人は安徽省の宣城に良い炭鉍を
 持っています。この前わざわざ共同経営できるか相
 談にきました。この炭鉍はかつて日本及び中国の多

炭鉦の区域は約三千畝、
一 採鉦の許可証あり、
一 炭の量は約五百萬トン以上、
一 炭の厚層は平均約五尺、
一 有煙炭の質は中等以上、
一 昔ながらの方法で開採し、毎日約五十トン以上、
一 鉦山より水路に至るまで、約十五清里、一夜に⁽¹⁹⁾
して蕪湖に到達する、
一 蕪湖での売価は約十四円（純利、約三円五十錢）
某技師いわく、十万円以上の機械があれば、毎日炭二
百トン以上の石炭を掘り出すことができ、毎トンの
純利三円五十錢で計算すると、毎日実に七百円に及
ぶはずです。その得た利益は多くないとは言えない。
この愚見についてすぐ相談し、馬場さんに近いうち⁽²¹⁾
に調査にくるようお願いしてください。まだ反日の
悪い風潮が終息していませんが、私が上海にいてお
世話をすれば、困難な事はないと思います。但し、こ
の件は、私の団体以外の人には秘密厳守でお願いし
ます。もしあなた方がこの件を進めることができな
いか、あるいは進める必要がなければ、すぐ回答して
ください。私が遅延のため友人に咎められないよう

何天烟古酒天香信

[illegible]

家父、宛々申上り此君裁り供ふらん
返さるる花也、祝ひ聲聞うとバ二三
日ばかりは、生え不有と云九諸君ノ
秋サレハ合ノ同業^ヲ職スルナラズ
何事振舞方他天^ヲトモ、去らる
解^リヤ
と、此君歸郷此等、我々ニ後金
久仰の日新送とも冬式を多
願客も目回より終食時より遷延
せし甘み酒するも病
皆探生なり付たり
十月十日 何人同
信之と云

今朝ハ辰卯見出、時日對晝晚
光中にも雲或る南極万回、何
事因仍途々、梅枝在然に從
石菴園遊、初一臺の提す可也
垢手や、後以進行、見難き
故所眺む、鳥物若く入、十、
此交交遊佳利、鳥増白、又羽傳
但用、遠き、好まざる、

信三と云 何人同

(該山之件ニ就テハ内幕ノ一人トセラレタシ。他
日謠言ヲ云ヒワラシ、我等ノ進行ヲ妨ゲラル、恐レ
アレバナリ。)

（私議ハ、来年正、二月頃ニ、一段落ヲ告グルコト、存候。然ラバ排日モ緩和サル、コト、断言致候。）

万事、相□一々誠意ヲ以テ、各其能力ヲ盡シ度。若シ区区タル時間ノ

所謂、九仞ノ山モ其切一簣ニシテ歛クト云フ事ヲ、

目下金匱ノ下落ハ底止スル所ヲ知ラズ。日本金拾

家父ノ祝ト申セシハ、此名義ヲ借りタルニ過キス。

若、直ニ祝ノ費用方トセバ二三千円アレバ可ナリ
小生、不肖ト忝モ諸君ノ顔サヘ見レバ金ノ問題ヲ言
ヒ出スモノニアラズ。何卒塚原其他諸君ハ、小生ノ
意ヲ了解被下度候。

皆々様へ宜敷御傳聲被下度候。

滔天先生

技師派遣ハ、馬場君一人ニテ十分ニ存候。此度、交

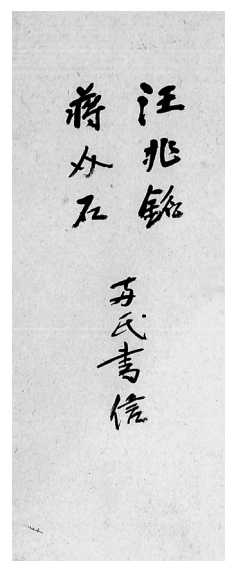
通便利ニテ、馬場氏も支那語ヲ使用シ得ラレ候ハ、都合宜敷候。

滔天先生

115 | 国民党及び南支石炭資源に関する資料（1）

2 蒋介石書簡（年不明） 十一月三日

【封筒】

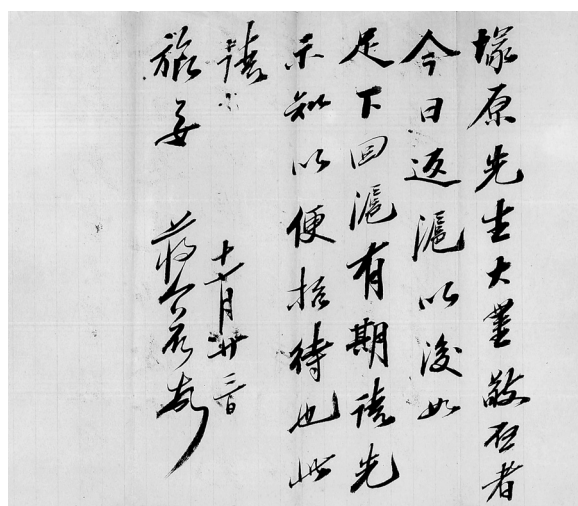


汪兆銘

萬氏書信

蒋介石

【本紙】



塚原先生大鑑敬啓者

今日返滬以後如

足下回滬有期請先

示知以便招待也此

請 十一月廿三日

旅安 蒋介石頓

【本紙訳文】

塚原先生大鑑敬啓者 本日上海に帰ります。今後もし貴下が上海に戻る期があれば、今回のもてなしと同様のもてなしができるように、どうぞ先に知らせてください。旅先での平安をお祈りいたします。

十一月二十三日⁽²⁾ 蒋介石拝

むすびに

以上に掲載した資料の解説は、平成二十三年度郷土調査担当石橋道秀、田中智美が担当した。これら書簡は解説が困難で、かつ難解な中国語を含んでいたため、苦難の連続であった。しかし、香蘭女子短期大学金斑実先生、佐賀大学地域学歴史文化研究センター伊藤昭弘先生、同文化教育学部中尾友香梨先生の助言を得て、何とか訳出することができた。また、その他多くの方々の助言を得て、掲載に至った。この場を借りて皆様に深甚の敬意を表したい。但し、本稿で取り上げた書簡は難解であるため、解説、翻訳は十分ではない部分が残されている。これらの部分については、読者諸賢の御批評を頂戴したい。

なお、塚原嘉一郎関係資料には、山東炭に関する分析結果情報提供の礼を述べた秋山真之書簡が含まれている。秋山真之が中国の国民党の革命運動を支援していたことは周知のことであるが、このことが裏付けられるものである。

本稿では紙面の都合により、国民党関係資料の一部しか紹介できなかった。塚原嘉一郎関係資料には、陳中孚、戴伝賢、唐紹儀、章士釗、謝晩石、殷汝耕、汪兆銘の他、宮崎滔天、芳川寛治、菊池隆等の書簡や資源開発に関わる規約が含まれている。これらについては別に紹介できる機会を得ることを望みつつ、本稿を結びたい。

参考文献

鐘屋一著『章士釗と近代中国政治史研究』、東京、芙蓉書房出版、二〇〇二。

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』、東京、吉川弘文館、一九八九。

櫻井眞清著『秋山真之』、東京、秋山眞之會、一九三三。

下中直人編『世界大百科事典』、東京、平凡社、二〇〇七。

中国・地図出版社『中華人民共和国地図集』第一版、東京、帝国書院、一丁秋潔・宋平

編・鈴木博訳『蒋介石書簡集』、東京、みず書房、二〇〇一。

中村義^{はか}編『近代日中関係史人名辞典』第一版、東京、東京堂出版、二〇一〇。

日外アソシエーツ株式会社編『中国人名事典 古代から現代まで』第一版、東京、株式

会社紀伊國屋書店、一九九三。

宮崎滔天著『宮崎滔天全集』東京、平凡社、一九七三。

山浦貫一編集者『森恪』、東京、森恪傳記編集會、一九四〇。

山本条太郎著『山本条太郎』東京、図書出版社、一九九〇。

(1) 塚原嘉一郎(一八七六―一九六〇)は、佐賀郡新北村寺井津(現佐賀市)生まれの実業家。三井物産を退職後、広く炭坑を経営した。

(2) 唐紹儀(一八六〇―一九三八)は清末民国初期の外交官、政治家。辛亥革命では、袁世凱側代表として伍廷芳と和議の交渉。一二年、袁大總統下、民国最初の国務總理に就任するが、対立して辞職。一七年、広東軍政府の財政課長、以後、南方代表として、北洋派と交渉にあたる。『国史大辞典』(一九八九)「唐紹儀」の項から抜粋。

(3) 章士釗(一八八二―一九七三)は湖南省出身。日本を経てイギリスに留学。辛亥革命直後に帰国し、『民立法』主筆として宋教仁の国民党結成を支持した。第二革命後、亡命先の東京で『甲寅』雑誌を発行し第三革命に参加した。一九一九年の南北和平会議には広東軍政府代表として出席。鑑屋一(二〇〇二・一六)から抜粋。

(4) 汪兆銘(一八八五―一九四四)は中国の政治家。号は清衛。日中戦争の間、日本に協力したため「漢奸」と呼ばれている。広東省の出身。父は浙江省から移住してきた小商人、母は後妻の呉氏。明治三七年(一九〇四)広東省政府の官費留学生として来日、二年後に東京法政大学速成科卒業。この間、孫文の指導する中国革命同盟会に加入、章炳麟を補佐して同会機関紙『民報』編集に参加。『国史大辞典』(一九八九)「汪兆銘」の項から抜粋。

(5) 「炯」を「炯」と表記している文献もあるが、本稿では書簡の表記に従い、「炯」の字を用いた。

(6) 宮崎滔天(一八七〇―一九二二)は明治・大正時代の中国革命運動家。明治三〇年(一八九七)秋、孫文と知り合い、以後孫文の革命運動の絶対的支援者として活動した。『国史大辞典』(一九八九)「宮崎滔天」の項から抜粋。

(7) 塚原は秋山真之に、山東博山炭に関する詳細な分析結果を提供している。「秋山

真之書簡」(明治四三年七月九日 図塚原〇六二二)。

(8) 明治以来政府の手に帰し、明治九年この方、三井物産が鉱山局から石炭の一手販売を引き受けて販路拡張に当たり、初めて上海に派出員を置いたのである。これが三池炭輸出の権輿で、同時に三井が支那貿易に乗り出す第一歩だったのである。山本条太郎(一九九〇・四四)。三井の鉱山調査については山浦貫一(一九四〇・二四四)を参考とした。

(9) 日外アソシエーツ株式会社(一九九三・九三)。

(10) 櫻井眞清(一九三三・二六三)。

(11) 「何天炯氏来朝経費其他塚原支払控」(一九二五年三月四日 図塚原〇四七七)。

(12) 『国史大辞典』(一九八九)「蒋介石」の項。

(13) 「塚原嘉一郎書簡控」(図塚原〇五〇九)。

(14) 山田純三郎(一八七六・五・一八―一九六〇・二・一八、孫文の協力者)カ。―中村義(二〇一〇・五九二)。

(15) 汪兆銘は一九一九年三月一日に訪日し、三月一七日に、横浜から春洋丸にて渡米している(宮崎滔天(一九七三・五卷 七二五))。

(16) 大正八年(一九一九)九月二七日。宮崎滔天は八幡丸にて上海を出帆している。(宮崎滔天(一九七三・五卷 七二六))。

(17) 第一次世界大戦(一九一四・七―一九一八・一一)カ。―日本大辞典刊行会(一九七四・五一〇)。

(18) 安徽省にある地名。―中国・地図出版社(一九七九・七二)。

(19) 十五清里は現在の長さに換算して、約八六・四キロメートル。―下中直人(二〇〇七・五〇二)「度量衡」。

(20) 蕪湖(ぶこ)。安徽省にある地名。長江航路の重要港で、水陸交通が便利。―中国・地図出版社(一九七九・七二)。

(21) 技師の馬場惟明カ(馬場惟明氏へ渡金計算・図塚原〇四六九)。

(22) 芳川寛治(一八八二・五・一二―一九五六・九・二九、実業家)カ。日支組合規約に名前あり。―猪野三郎(一九八九・五〇)。

(23) 菊池良一(一八七九・一〇・一―一九四五・二・二五、山田純三郎の従兄弟、孫文の協力者)カ。日支組合規約に名前あり。―中村義(二〇一〇・二二六)。

(24) 犬塚信太郎(一八七四・三・二四―一九一九・一二・一〇、満鉄理事、孫文の協力者)カ。日支組合規約に名前あり。―中村義(二〇一〇・七二)。

(25) 地名カ。遺称地不詳。

(26) 九切の山を築くためには、最後の一杯のもつこの土を欠いても完成しない。九割九分完成した大きな仕事、最後のわずかな油断で成し遂げられないことの比喩。

(27) 『蒋介石書簡集』(上)の年表で確認したが、年代の特定は出来なかった。

国民党及び南支石炭資源に関する資料目録

<何天炯>汪兆銘を含む

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
何天炯書簡	図塚原0240	〔大正8年〕7月4日 1919年	何天炯	25.2	状	墨書	塚原先生	汪兆銘書簡及び 「昭和二八・七・二八 西 日本」とペン書きされた 新聞切抜き同封。
汪兆銘書簡		3月12日 〔1919年〕	汪兆銘	18.1	状	墨書	玉章我兄	
何天炯書簡	図塚原0336	〔大正8年〕9月25日 1919年	何天炯	26.4	状	墨書	山田、塚原、菊池 三先生	
〔何天炯氏来朝経費 其他塚原支払控〕	図塚原0477	大正14年3月4日 1925年	旅館 扶桑館	20	綴	ペン書	何様	領収書の綴。封筒入り。
何天炯書簡	図塚原0329	7月27日	何天炯	25.4	状	墨書	塚原先生	
何天炯書簡	図塚原0284	10月18日	何天炯	14.2	状	墨書	滔天先生	

<蒋介石>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
蒋介石書簡	図塚原0232	11月23日	蒋介石	19.8	状	墨書	塚原先生	「汪兆銘 蒋介石 両氏 書信」と墨書された封筒 に一通のみ封入。

<殷汝耕>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
殷汝耕書簡	図塚原0537	2月8日	殷汝耕	25.2	状	墨書	塚原仁兄	
殷汝耕書簡	図塚原0536	4月5日	殷汝耕	26	状	墨書	塚原嘉一郎殿	

<陳中孚>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
陳中孚書簡	図塚原0209	大正8年9月4日 1919年	陳中孚	23.2	状	墨書	芳川寛治殿、 塚原嘉一郎殿	図塚原0511と同内容。
〔陳中孚書簡〕	図塚原0511	大正8年9月4日 1919年	陳中孚	27	状	用箋に 炭酸紙 複写	芳川寛治殿、 塚原嘉一郎殿	図塚原0209と同内容。

<徐謙>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
徐謙書簡	図塚原0231	中華民国7年11月13日 1918年	徐謙	26.8	状	墨書	塚原先生閣下	軍政府司法部用箋を使用。

<戴伝賢>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
戴伝賢書簡	図塚原0238	10月27日	戴伝賢	26.3	状	墨書	〔塚原先生 陳競 存先生〕	

<唐紹儀>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
唐紹儀書簡	図塚原0239	〔大正7年〕12月24日 1918年	唐紹儀	26.4	状	墨書	塚原嘉一郎殿	

<唐>

資料名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
〔唐書簡〕	図塚原0530	〔なし〕	唐	15.5	状	ペン書	塚原先生	

<章士釗・謝曉石>

資料名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
章士釗・謝曉石書簡	図塚原0535	〔なし〕	章士釗・ 謝曉石	20.8	状	墨書	塚原先生	

<殷□>

資 料 名	請求記号	成立・出版年	著者 (差出人)	法量 (縦)	形状	用筆 注記	宛 先	摘 要
殷□書簡	図塚原0538	9月12日	殷□	25	状	墨書	塚原我兄	